山形大学医学部附属病院からの
お知らせ
NEWS
Spring 2018
06
発行：2018年4月13日

●Topics…「形成外科」を開設しました　●診療科の取組案内…精神科
●診療科の取組案内…眼科　●Information…附属病院の院内サインを一新しました

山形大学医学部附属病院の最新の医療を紹介する広報誌VOL.6が出来上がりました。これを機会に当院の医療を知っていただき、地域のリソースとして有効に活用していただければと思います。

Topics

4月から独立した診療科として「形成外科」を開設しました

2018年4月より附属病院形成外科の科長に就任した福田憲翁（のりお）と申します。本院形成外科は、今まで歯科口腔・形成外科という診療科名にて、歯科口腔外科の中の一診療班でしたが、4月より独立した診療科として開設いたしました。常勤の医師も1人から4人へ増員し、より幅広い医療を行うことができるものと考えております。

形成外科は「様々な原因による体表の異常、変形、欠損に対して、形態的および機能的な改善をめざして治療を行う科」といえます。扱う疾患群としては、先天性形態異常、外傷、腫瘍とその切除後の再建、瘢痕・瘢痕拘縮、難治性潰瘍、その他となり、対象は新生児からお年寄りまで、頭から足の先までと多岐にわたります。他の外科系診療科と一緒に手術を行うことも多くあります。

形成外科は、基本領域診療科の1つです。全国の大学病院ではだいぶ設置が進んできましたが、存在していない施設もまだございます。形成外科は、なくても何とかなるかもしれませんが、あるとその施設や周囲地域全体の診療レベルを上げることができると信じております。心のこもった医療を常に心がけ、患者さん・院内の皆様・地域の医療機関の皆様から信頼される診療科を目指してゆきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

診療科の取組案内 1　精神科

うつ病や発達障害、認知症などが社会問題にもなっている昨今、大学病院精神科で治療を受ける人は年々増加し、2015年の外来新患数は1000名を超えました。当院では、幅広い年齢層の様々な疾患に対して、各領域の専門医が心理社会的療法および薬物療法をバランスよく行っています。難治性のうつ病や児童期のこころの不調、精神疾患と認知症の鑑別が難しい症例等をご紹介いただければと思います。

〈気分障害圏・統合失調症圏〉

標準的な精神療法に加え、臨床精神神経薬理学会の指導医・専門医の指導のもと最新の知見に基づく薬物療法を行っております。患者さん毎に、適切な薬剤、量、投与方法を考え、予後の改善を目指しています。また、難治性の緊張病症候群を呈した方には、麻酔科医と協力しながら修正型電気けいれん療法を行っています。

〈児童青年期精神障害〉

ADHDや自閉スペクトラム症などの発達障害に対する認識は2000年頃から徐々に広がりをみせ、社会に広く受け入れられつつあります。発達障害を含め児童期の心の不調について、診断名だけにとらわれずに、個別に最適な薬物療法や心理療法とは何かを臨床的に検討しながら取り組んでいます。医師だけでなく、臨床心理士や精神保健福祉士とともに、学校や保護者を含め地域と連携できるよう努めております。

〈老年期精神障害〉

高齢者のうつ病や妄想性障害などの精神疾患はレビー小体型認知症や前頭側頭葉変性症などの認知症と鑑別が難しい場合があります。認知症が疑われる場合には、最新の脳画像検査を施行し、高次脳機能科、神経内科などと合同カンファレンスを開き診断や治療法について検討しています。

会議の様子

□問い合わせ／山形大学医学部附属病院 〒990-9585 山形県山形市飯田西2-2-2　TEL 023-633-1122　http://www1.id.yamagata-u.ac.jp/MIDINFO/
山形大学医学部総務課庶務担当　TEL 023-628-5006　E-mail isosyomu@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

診療科の取組案内 2　眼　科

〈白内障〉

先天性白内障、水晶体亜脱臼・落下、成熟白内障などの難症例、全身麻酔下での手術や全身管理が必要な患者の手術も積極的に行っています。

〈網膜硝子体疾患〉

難治性網膜硝子体疾患の治療を、薬物治療、手術を適切に組み合わせて行っており、治療成績は全国でもトップレベルです。病態を三次元で捉え、有効で安全な手術のためにOCT（光干渉断層撮影）手術顕微鏡を用いた最先端の硝子体手術を行っています。これにより手術中の網膜の詳細な情報を把握できるだけでなく、病態の記録、学生や研修医に対する教育にも非常に役立っています。

〈眼窩・腫瘍・眼瞼〉

眼科の悪性腫瘍は、他の部位の悪性腫瘍と同じように浸潤、転移し生命にかかわる問題となります。腫瘍の診断、治療をおこなえる施設は少ないため専門医がいる病院で治療を受けることが望ましいです。

〈小児眼科〉

小児期に視力の発達が障害されてしまう斜視・弱視、先天性疾患の早期発見・早期治療につとめています。全身麻酔下での小児の手術が可能です。

〈緑内障〉

病態、重症度にあわせて薬物療法と手術を組み合わせた治療を行なっています。手術として、チューブシャント手術、マイクロフックab　internoトラベクロトミー、バルベルト手術などの最新の手術を導入しており、難治性緑内障に対するバルベルト手術の成績は全国でもトップレベルです。

〈角膜疾患〉

角膜が混濁した病態の治療として角膜全層を移植する方法のみでなく病態にあわせて必要な角膜のパーツを移植する移植方法を導入し実績を上げています。

OCT（光干渉断層撮影）付き手術顕微鏡を用いた最先端の網膜硝子体手術の様子

Information

東北芸術工科大学とのコラボレーションにより附属病院の院内サインを一新しました。

山形大学医学部は、平成31年度に治療開始を目指している重粒子線がん治療を核とした最先端医療の提供にあたり、山形大学医学部先端医療国際交流推進協議会の設立（平成28年9月）やジャパン・インターナショナル・ホスピタルズの認証（平成29年12月）を受けるなど、医療インバウンドの推進に取り組んでいます。

山形大学医学部では、国際化に対応した附属病院のサインのあり方について昨年から検討を開始し、職員や学生を対象にしたアンケート調査を行うなどして課題を抽出した結果、「読むサインから見るサイン」「記号・色・言葉を組み合わせたサイン」「外科系や内科系などゾーン毎に色分けしたサイン」の3つをコンセプトに院内サインを一新することにしました。加えて、東北芸術工科大学デザイン工学部とコラボレーションすることにより、アート・デザインを用いた患者さんに優しい環境創りの実現も目指しました。

平成30年3月8日（木）、附属病院外来棟のメイン部分のサインの切り替えが済んだことから、山形大学医学部と東北芸術工科大学による共同記者会見を開催して、院内サイン切り替えのねらい・今後の展望について説明した後に、新サインの公開を行いました。附属病院を訪れた患者さんからは、「病院の雰囲気が明るくなった」「案内がわかりやすくなった」などの好意的な感想が寄せられています。

3月8日（木）の記者会見後の写真撮影

左：各部門を大きな単位でゾーン分け　右：読むサインから見るサインへ